

## 17 内藤記念くすり博物館蔵「浅田宗伯の薬箱」について

中村輝子・遠藤次郎<sup>1)</sup>  
ヴォルフガング ミヒエル<sup>2)</sup>

文部科学省特定領域研究「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査研究」の一環として、江戸時代（明治時代初期）の医薬品の実態調査を行っている。今回は、内藤記念くすり博物館蔵「浅田宗伯の往診用薬箱」について報告したい。

浅田宗伯（一八一五〜九四）は幕末から明治中期に活躍した漢方の大家であり、安政二年（一八五五）、幕府の御目見得医師となり、慶応二年（一八六六）には法眼の位を授けられた。その後、明治政府が西洋医学を採用して漢方を軽視した折には、漢方存続運動を展開した。現在も「浅田流漢方」という名が残るほどに、彼の治療法にはいくつの特徴がみられ、「古方を主にし、後世方を運用す」という言葉が示すように、折衷派に属し、

また、日本で発達した処方（本朝経験方）も広く採用したと言われている。これらの特徴が往診用薬箱の薬物に、どの程度、認められるかについて注目した。

この往診用薬箱は、箱の外面に彩色の金唐皮が張られ、横三センチ、奥行き一八センチ、高さ二九センチ。最上段は上蓋を被せる形であるが、それ以外の四段は抜き通しの引き出しになっている。各段には赤褐色（淡褐色の厚手の和紙の袋に製剤や生薬を詰めたもの）並び、その薬袋には墨で一字薬名あるいは製剤の略名が記されている。

薬箱の最上段の箱には三九の薬袋が収められ、そのうち一四袋は丸剤、八袋は散剤、一七袋は生薬であった。丸剤については、薬袋の表書きから、全ての処方名を推定できたが、その内、一三種類の丸剤が浅田宗伯『勿誤薬室方函』に収載された処方であった。散剤についても、処方名を推定できた五種類の処方、同書に収載されていた。これらの処方の出典をたどれば、その半数近くは既に日本で使われていたものに由来し、和田東郭、吉益東洞、山脇道翊、中西深斎、吉益南涯、華岡青

洲、家方などであった。また、丸剤の処方には大黃、硝石、石膏などの使用が目立ち、下剤、利水剤を用いて、慢性的な毒や脚気水腫・脚気衝心などに対応したことがうかがわれた。この段の一七種類の生薬のうち、同定できた一五種類の生薬では、『傷寒論』あるいは『金匱要略』（以下、『傷寒・金匱』）に見られるものは僅かに五種類に過ぎず、それ以外の生薬であることが注目された。最上段の箱を外した下の空間には、調剤に使う薬匙や文鎮などとともに、白い葉袋に羚羊角が収められていた。

以上の部分に続く、四段の引き出しには、製剤ではなく、生薬が収められていた。引き出しの最上段ならびに二段目には三九の葉袋（葉袋の大きさは、二三×五〇×二一ミリ）三段目には二六袋（葉袋の大きさは二三×七五×二七ミリ）、四段目には二四袋（葉袋の大きさは二四×七五×五〇ミリ）が並んでいた。大半のものに生薬が残っており、これらについては、生薬の外形と葉袋に記された一字薬名から、その生薬を同定した。なお、生薬が残っていないものについては、一字薬名から、その生

薬名を推定した。

最上段の引き出しのもので、生薬を同定あるいは推定できたもの三七種類、二段目では二八種類、三段目では二三種類、四段目では二四種類であった。そのうち、『傷寒・金匱』に見られるものは、最上段では一九種類（五一％）、二段目では九種類（三二％）、三段目では一五種類（六五％）、四段目では二四種類（二〇〇％）であった。このことから、最下段は古方派に基づく生薬、上段のものは後世派に基づく生薬、というような形に、ある程度、区分されていることが分かった。四段目は、葉袋が大きく、携帯する量も多いことから、しばしば使う生薬であると思われる。また、引き出し式の薬箱は下から開けることを考え合わせれば、下段が最も多用する生薬であり、『傷寒・金匱』の生薬をしばしば使っていたことが理解される。

<sup>(1)</sup>（東京理科大学薬学部）

<sup>(2)</sup>（九州大学言語文化研究院）